

平成元年 1989年 創刊 No.435

月刊ウィーン

GEKKAN-WIEN 2026年7&8月号



Jan Bruegel d. Ä. Großer Blumenstrauß in einem Holzgefäß um 1606/1607
© Kunsthistorisches Museum, Gemäldegalerie

杉本純の原子力の話 II ウィーンと京都 No. 168

杉本純（東京科学大学特任教授 元京都大学教授 元原子力機構ウィーン事務所長）

東京科学大学が代表校を務める大学連合の2026年度第1回企画運営会議が5月19日午後大岡山キャンパスにおいてオンライン併用で開催された。その中で2026年度「海外インターンシップ研修」への応募として、4大学から5名の第1次選抜候補者に対する面接審査を実施した。候補者5名のうち、国際原子力機関(IAEA、本部：ウィーン)への派遣希望者は3名、経済協力開発機構／原子力機関(OECD/NEA、本部：パリ)への派遣希望者は2名であった。

小林教授兼副所長（大学連合代表）の司会により、面接審査の進め方を審査教員に対して説明した後、筆者より各応募者に対して、応募動機・目的、目標・計画、期待する成果と成果の将来の研究・キャリアへの活かし方など、同一の質問を英語でして、各応募者から英語で回答してもらい、その後、審査委員と応募者との間で質疑応答を行うことにより、応募者の技術的能力や熱意、英語のコミュニケーション力も審査した。

面接審査には都合で欠席の委員もいたため、質疑応答の様子をビデオに録画し、応募書類とともに全審査委員に送付し、各応募者に対する審査結果を事務局に送付してもらった。5月28日に大岡山キャンパスにおいてオンライン併用で開催された第2回企画運営会議では、各委員の評価結果に基づき議論を尽くした厳正な審査の結果、IAEA派遣者候補として北海道大学の博士課程1年及び東北大学の修士課程1年の学生、ならびにOECD/NEA派遣者候補として北海道大学の修士課程1年の学生、計3名の第2次選抜者を決定した。

今後、IAEA及びOECD/NEAの各国際機関に対して、第2次選抜者を海外インターンシップ派遣候補者として推薦し、書類選考で合格したら配属受入予定箇所と面接を行い、その結果、先方が受入承認となれば、各国際機関への派遣者として最終決定され、派遣準備を進めることになる。

さて、今月のウィーンと京都の対比では、両市の7月の風物詩を紹介したい。ウィーンでは、市庁舎前広場で7月に開催されるフィルム・フェスティバルが夏の風物詩となっている。1991年に始まったこの催しでは、オペラやクラシック音楽、バレエなどの映像作品が巨大スクリーンで上映され、周囲には各国料理の屋台が並ぶ。入場無料ということもあり、毎年数十万人が訪れ、歴史的な市庁舎を背景に芸術と市民生活が融合する場となっている。夏の夕暮れの中、多くの人々が音楽と映像を楽しむ光景は、芸術都市ウィーンの開放的な魅力を象徴している。

一方、京都では7月の祇園祭が夏を代表する行事である。千年以上の歴史をもつこの祭は疫病退散を願う神事に起源をもち、現在も八坂神社を中心に1ヶ月にわたって様々な行事が続く。なかでも炎天下に催行される山鉦巡行の前夜を彩る宵山は、多くの人々で賑わ

う祭のハイライトである。提灯に照らされた山鉾が町並みに浮かび上がり、祇園囃子が優雅に響く中、古都の街は幻想的な雰囲気包まれる。山鉾巡行と宵山の期間には毎年百万人規模の見物客が訪れ、京都を代表する夏の祭礼として国内外に広く知られている。

ウィーンのフィルム・フェスティバルが現代の映像芸術を市民に開く祝祭であるのに対し、京都の祇園祭は長い歴史の中で受け継がれてきた伝統文化の結晶である。形は異なりながらも、いずれも都市の中心部に多くの人々が集い、文化を共有する夏の大イベントである点は共通している。両市はそれぞれの方法で、歴史と文化の魅力を次代へ伝えている。

余談であるが、ウィーン在住時にフィルム・フェスティバルでは映像と世界各国の料理を大いに楽しんだ。京都の学生時代、祇園祭の船鉾を曳くアルバイトをした。四条河原町での辻回しの最中、汗びっしょりになって見上げた北西角の2階席に、両脇に舞妓さんを従えたNHKの宮田輝アナウンサーの姿があった。その光景は今でも忘れられない。今月も両市の7月の風物詩を紹介することができた幸運に感謝しつつ、筆者がウィーン滞在中に描いたフィルム・フェスティバルのスケッチを掲載させていただく。



「海外インターンシップ研修」第2次選抜審査の様子

